

滞在型研究員報告書（様式2）

（2008年9月策定）

国立天文台滞在型研究員の方には期間中の成果について報告をしていただくことになっております。このフォームに記していただき期間終了2週間以内に国立天文台研究支援係にご提出ください。なおこの報告書は研究成果の論文掲載前でも研究交流委員会のweb上に公開いたしますので、研究内容の詳細について記入していただく必要はありません。この研究の成果を学術誌等で発表するときはその旨を謝辞に記載してください。

所属 國學院大學大学院

氏名 落合敦子

受け入れ 氏名：相馬充

滞在期間 2011年8月17日～2011年8月31日

I. 滞在型研究員として国立天文台滞在中に行った活動について簡単にお書きください。

元嘉暦は紀元四百四十五年（元嘉二十二年）に施行され、宋時代に編纂された『宋書』卷十三 志第三（中華書局版）に記録されている。その『宋書』の本文を原文で読み進め、元嘉暦法の計算を行った。その際必要に応じて、暦の歴史をさかのぼり、景初暦（紀元二百三十七年 景初元年施行）を『宋書志』宝永三年 松會堂版などから勉強した。この研究にあたっては、申請期間中毎回朝10時から夕方5時まで、国立天文台の相馬充、上田暁俊、谷川清隆の三氏及び國學院大学の渡辺瑞穂子氏と合宿形式で、合計11回、国立天文台において勉強会を行った。

II. 今回滞在型研究員として得られた成果について簡単にお書きください。

元嘉暦法で任意の年の暦を作成出来るようになった。また、日月食の計算法を習得した。『日本書紀』皇極二年五月十六日条にある「五月の庚戌の朔乙丑に、月蝕えたること有り」という記述の真偽を確認する計算を行った。これが本研究の目的であった。計算によれば、記述通りに月食はあった。しかも月食は午前7時50分であるため日本からは観測不可能である。これは現代の計算と一致する。元嘉暦法の正確さが証明された。以上の結果に関しては先行研究はなく、結果を論文にまとめるつもりである。『日本書紀』の記述に何故この事象が組み込まれたか、天文学・歴史学の観点から大きな疑問点を残した。

III. この制度についてなにか御意見がありましたら、なんでも記入ください。

たいへんありがたい制度だと思います。